子ども、中青、大人

いも

大昔、人は自らの成長を止められなかった。

「現在は違いますね。子どもと大人の間にある思春期に成長を止めた人を、中青といいます。初潮か精通が起こってから、十八歳の誕生日を迎えるまでの間に、誰もが市役所に申請をすれば中青手術を受けて体の成長を止めることができますね。中青になると寿命によって死ぬことはなくなる代わりに、子どもを作ることができなくなる。……まあこの辺りは、ざっとでいいかな。小学校から中学校の、歴史や保健の教科書には必ず書かれていることだから、皆知ってるし、共通テストにも出ないし」

倫理担当の教師、大西は、黒板消しを持って教室の生徒達を見渡す。見渡すほどクラスメイトの数は多くない。二十人もいないのだから。けれど、大西は十三歳で中青になったために背が低く、後ろの方に座っている生徒の顔を見るときには背伸びをする癖をもっていた。

「この辺消すけど、いい？」

少女のような声が、教室にこだまする。反応が薄いのが悲しい……。何人か、頷く代わりに船を漕いでいる。昼休み、弁当を食べた後の座学は眠くなるのだろう。大西は黒板の半分を消しながら、生徒に気づかれない程度のため息をつく。

子どもの頃から、学校の先生になるのが夢だった。成長を止めれば、定年退職も関係無くなり、よりたくさんの生徒の卒業を見届けることができる。今思えば、我ながらなんて単純な考え、と呆れるが、教員を務めて今年で十年目、三十三歳になって思う。これで良かったのではないかと。教員は結局キャリアがものを言うのだから。

……しかし、最近の生徒達の……今時の子どもの感覚についていくのは、いつだって難しい。授業で、中青についての話をするとよくそう感じるのだ。

既に中青になっている生徒を除くと、この世代の生徒達は、中青になる、ならないに無関心だ。そのちょっと前の代の生徒達は、中青という選択肢に過敏で、中青の話をすると目に見えてピリピリしていた。こっちの代では、既に中青になった生徒とそうでない生徒との間で軋轢が生じやすい。

この二つの流れを行ったり来たりしているところは、ファッションの流行と似ているかもしれない。中青制度が導入される以前の思春期の少年少女にも、こういう世代ごとに行き来する傾向みたいなものはあったようだが。

自分が過敏な世代だったからか、大西には今の生徒達のような無関心世代が大人びていて、「自分は自分。よそはよそ」と自分を確立しているように思えた。過敏世代に比べて激しい反抗期を迎える生徒が少なく、校則などのルールも破りたがらない。いってしまえば、扱いやすいのだ。

無関心世代に困ったところがあるとしたら、とにかく受動的なところだ。何かと他人任せ、親任せなので文化祭の企画

立案も進路指導も難航する。そして授業で発問しても全然答えてくれない。自分の授業に問題があるのかと思ったが、他の先生方の授業でも変わらないらしい。
「うーん、そうだなあ。一応、一般常識として知っておかなきゃいけないからな。問題！　佐藤」
　居眠りをしていた佐藤は、ビクッと目を開ける。
「中青制度の施行は何年から？」
「……に、二五六九年？」
「正解。これは皆、テストとか関係なく知ってなきゃいけないからね。はい、眠い人頑張れ！」
大西はパン、と手を叩いた。
　こういうところが嫌味だと嫌われて、授業が盛り上がらないのかもしれなかったが、このクラスの担任として必要な指導だと、大西は割り切っている。こういうことは、他の先生方にはしづらいことだし、担任である自分がすべきことなのだからと。

　今日も無事に、生徒達の学校生活が終わる……我々、教員の学校生活はまだまだ続くのだが。何はともあれ、窓から射し込む夕日の柿色が目に染みるのは、良い一日だった証拠だ。
「じゃあこれで、ホームルームは以上かな。何か連絡がある人？」
いないらしい。大西は教壇の上に乗っている、紙の束をトントンと揃える。が、日直の中村が号令をかけてしまった。
「起立」
「ちょっと待って！　最後にこれだけ配る。保護者の方にしっかり渡すように」
各列の最前に座る生徒達に四、五枚ずつ配り、後ろに回してもらう。立ちかけていた生徒達は、やや億劫そうにのろのろ座り直した。そして、紙を見るなり生徒達はぼそぼそとざわめく。
「やべえ、この前の期末のこと、絶対怒られる」
「ええー、どうしよ」
「うち父親が来るかも、最悪」
大西はこのざわめきを聞くのが、ちょっと面白くて好きだった。尖っていようと無気力だろうと、いつの年代の生徒達も同じようなことをぼやく。なんだか可愛いな、と思うのだった。
「はいはい、静かに！　来週の水曜までに、この紙に希望する日程を三つまで書いて持ってきてください。『どうしても都合が合う日がない』とか、『この日しか無理』って場合には先生に直接言いに来てください。その辺は皆さんを通して、保護者の方と調整できます。ただし『うちの保護者来ませんけどいいですか？』っていうのはナシです！　三者面談ですから！」
大西の言葉に笑う生徒、まだ不安げに三者面談希望日程調査表を見つめる生徒、さっさと鞄に調査表をしまう生徒……もうホームルーム終了時間を二分過ぎていた。

この後の掃除に響くとまずい。「はい、さようなら〜！」といい加減に締めくくってしまった。

掃除中に校内のスピーカーから流れる、放送委員が選ぶ流行りのアイドルの曲が止まって五分。部活のない生徒達がわらわらと校門に向かって歩いていく背中が、職員室から見える。

さて、明日の授業に必要なプリントの印刷にとりかかるか……自分のデスクから腰を上げたときだった。

「大西先生？　ちょっと待ってね」

背後にある職員室の引き戸前で、数学担当の高崎がそう言った。ああ、日直日誌を渡しに来たのだろう。

振り向くと、いかにも数学教師といった感じの青いネクタイに黒縁眼鏡がよく似合う高崎が、スス……と近づいてきた。

「大西先生、中村さんが……」

「ああ、すいません。ありがとうございます」

高崎は妙に気遣わしげな顔で、正面に位置するデスクに戻っていく。ツカツカとすれ違うとき、背の高さに圧倒される。職員室にいる大人の中でも頭一つ抜けて高い。たまの休日には猫カフェに行っているような、柔和な性格の先生なのに、生徒から委縮される理由がなんとなく分かる気がした。

「大西先生……」

「日直、ご苦労様。日誌を渡しに来てくれたんだね？」

日誌を受け取ると、中村はブレザーのリボンが飾る胸元に目を落として、「えっと、それもそうなんですけど」と言いよどんだ。

「うん？」

「三者面談のことで、相談があるんですけど、今、お時間大丈夫ですか？」

中村の成績は学年上位二十五％に位置している。先日の期末テストもなかなか良い結果で、進路について心配することはそう多くないはずなのだが……。ご両親の都合の合う日程についてとか、進学したい大学が決まらないとかだろうか。

「ああ、もちろん。職員室の奥でいい？　もしあれなら、進路指導室が空いてるけど」

「じゃあ、進路指導室でお願いします」

「うん。分かった」

進路指導室に向かう間の廊下で、大西は「やあ、暑くなってきたな」と雑談を試みた。

「あはは、そうですねぇ……」

愛想笑いで返されてしまった。何か思いつめた横顔で、とても天気のことなど気にしている余裕はなさそうだ。

進路指導室には、白い長机が六つと、その机を囲むパイプ椅子がシンと佇んでいる。一番近くの椅子二脚に、それぞれ座った。こういうとき、大西は生徒に圧迫感を感じさせないように対面から少しずれた位置に座るようにしているが、中村は真面目に大西の体に向き合って座り直してしまった。ま

あ、彼女はそのほうが話しやすいのかもしれない……と、大西はそのまま話を聞くことにする。座高も中村のほうが高いのを見て、俺って足が短いわけじゃないんだな、と場に不釣り合いなことを考えてしまった。
「ええと、三者面談のことで、相談があるんだったな」
「はい。でも、三者面談のときに話す、進路のことにも関わるんですけど……その、中青手術のことなんです」
そうか。最近は中青手術の相談を受けることがなかったから、念頭になかったが、専門学校や大学への進学、もっと先には就職に、中青手術を受けるか否かが関わってくることがあるのだ。
　あれは十年前だったか……劇団で活動している女子生徒がいた。三澤といったか。彼女は高校卒業後に俳優を養成する事務所に入るつもりで、高校生の外見のまま俳優活動を続けていきたいから、中青になりたいと言った。しかし、彼女の両親は中青手術にも、事務所に入ることにも反対だという相談だった。中青手術は、両親の同意がなくても受けられる。が、実際、大半の人が両親の同意なくして手術に踏み切れないのだ。
　中村の進路希望調査には、第一希望から第三希望まで四年制大学の名前が書かれていた。
「中村は、たしか医学部のある四年制大学を希望調査に書いてたよね」
「はい。それは変わらないんですけど……。先生はいつかの授業のときに、たくさんの生徒を見るために、中青になったと仰いましたよね」
唐突に話が飛躍した気がしたが、大西は黙って頷いた。成績優秀な中村だが、実はプレゼンテーションや意見の発表は苦手だったりする。
「私、医師になりたいのは変わらないんですけど、歳を重ねると手元がおぼつかなくなったり、体力の面で朝も夜もなく働くの、厳しくなってくると思って。だから今のうちに中青手術を受けたほうが、ずっと医師として働けるかと思ったんです」
「ああ、なるほどなぁ」
中青制度が施行されてもう百年になるが、いまだに教師や老人ホームは人手不足だし、待機児童問題も解決していない。医師の忙しさも、百年前とそう変わらない。
　十五年ほど前、中青手術を受けた受験生にだけ、入試の点数に下駄をはかせていたことが明らかになった大学が、連日ニュースに取り上げられた。大学や企業は、中青手術を受けたか否かを合否や採用に影響させる場合、そのことを明言しなければならないという規定がある。この事件があってから、規定違反に対するチェックは厳しくなった。
　しかし、大学の医学部には中青手術なしでも入れるが、病院側は、中青手術を受けて身体年齢が若いままの医師を望む傾向にあることも事実だ。
「最終的に決めるのは中村だけど、先生はいいと思うよ。大

学に入ることだけじゃなくて、その先……医師として働くことも見据えると、確かに中青手術を受けるメリットは大きい」
中村はこくこくと頷く。しかしその眉間には、皺が寄せられている。
「でも、両親は中青手術を受けることに反対なんです」
「そうか……。三者面談の期間中には、意見がまとまらなそうかな？」
「はい。たぶんこのままだと、面談当日に先生の前で親ともめることになっちゃいそうで。その……」
意を決するように、息を吸って彼女は言った。
「無理を承知でお願いするのですが、両親に、私の中青手術を許可するように言ってくれませんか？」
それは……
「ちょっと、無理だな。さっきも言ったけど、やっぱり人生に関わることだから。後悔しないためにも、ご両親とよく相談した上で、中村本人が手術を決断する必要があると思う」
この道理が分からない彼女ではない。彼女はまた、こくりと頷く。
「中青手術のメリットを説明することなら先生にも協力できるけど……ご両親が反対する理由は分かる？」
頷くような、首をかしげるような。
「子ども……」
やっぱり。
「子ども、産めなくなるからだめって」
三澤の両親の、反対理由と同じだ。そして、大西の両親もそう言って、手術前日まで泣いて息子を説得しようとした。
　両親というものとは当然ながら、中青手術を受けず大人になって、子どもを授かった人なのである。これも中青制度が施行される以前にもあった現象だが、一度親になった人は、人生の醍醐味は子どもだと思い込みやすくなる。「自分の生きた証を残せることは素晴らしい」、「自分が生み出した命が成長し、また新たな命を生むことこそが生きる意味」。個人の人生において、そう考えることは自由だ。しかし、「だから中青手術を受けるなんてもったいない」、「大人になって子どもを産まなければ人生の意味などない」と主張することは、他人の人生の否定であり、他人の自由の侵害だ。大西はそう思っている。
　教師をやっていると、悲しいことだが親から人生の足枷だと言われて育った生徒にも出会う。そして、その数は少なくない。
「あんたなんか産まなきゃよかった！」
　これは三年前、三者面談後の廊下で生徒の母親から実際に聞いた言葉であり、大西自身が手術後に、母親から言われた言葉である。面と向かって、存在を否定される子どももいるのだ。
　中青の語源は、中間と青年である。しかし、議会での構想段階では中性と表記する案もあったらしい。中青制度の導

入によって、人は自分の性をよりコントロールできるようになる、と考えられていたためである。施行後の現在、本当にコントロールできているかは定かではないが、少なくとも人は男性の体にも、女性の体にもならないという選択ができるようになった。性別が完全に無くなったわけではないが、第二次性徴を無くすことは可能になったのである。

逆を言えば、子どもを作れる体に成長することを選んだのは、紛れもなく親自身なのだ。それで「あんたなんか産まなきゃよかった！」と言われても、子どもは困ることしかできない。もしかすると、これも中青制度導入以前からあったことなのかもしれないが。……中青制度は、大人でいること、子どもを作ることの責任を重くしたと思う。

『今はいらないと思ってるかもしれないけど、後で絶対欲しくなる。そのときに絶対後悔するから』って……。先生は、子どもをもてないことを後悔したことって、ありますか？」

「いや、先生はまだ、ない。少なくとも今は中青になったのを後悔したことはないな」

「今は……」

「うん。この先のことは分からない。でも、それは大人になろうと中青になろうと、同じだよ。誰も未来を見ることはできないからね。だからこそ、後悔する可能性を低くするために一緒に考えよう」

どっちの道に進んでも、後悔してもしなくても自分の責任だからこそ、中村が自分で決めるべきなのだ。

「お願い亜美、よく考えて……」

亜美。テストの解答用紙なんかで見慣れていた名前だが、中村は友達にも「中村ちゃん」「なかむん」「なーちゃん」などと呼ばれているので、下の名前の存在感が薄い。そうだった、彼女は中村亜美なのだ。

母親に揺すられながら、亜美は対面して座っている大西を子犬のような目で見つめた。

「先生、すみません。結局こんなことになってしまって……」

「いえいえ、家でもたくさん相談してくれたのは、先生も分かってるから。それでも決まらなかったんだから、仕方ないよ」

中村はあれからも定期的に、両親との話し合いの進展について報告してくれた。大西もその都度、近年の医療関連の業界における、中青のメリット、デメリットについて調べた資料を中村経由で、彼女の両親に渡してきた。しかし進展といえるほどの進展はなく、ついに三者面談最終日の最終枠が来てしまったのだ。

「私はやっぱり、中青手術を受けたいです。子どもを欲しいとは思っていないし、医師になるなら経済的に、自分や両親の老後も、子どもがいなくても問題ないと思うので」

「そういうことじゃなくて！　ねえ先生、仕事だけが人生じゃないでしょう？　せっかく女の子に生まれたのに、何も産まずに終わるなんてあんまりじゃないですか」

「お母さん、それは亜美さんが決めることです」

「失礼ですが、先生だって奥さんとか子どもとか、いればよかったのにって思うことはあるでしょう？」
「いえ、私は」
「亜美に気を遣わなくたっていいんです。人って絶対一人じゃ生きていけないんだから……」
当然のように、自分の人生を否定された。しかし慣れているので、大西は傷つかなかった。大人になった人は中青の人生など考えられないように、中青になった人は大人の人生など考えられないのだから仕方のないことだろうが、こうなるともう平行線だ。三澤のときもそうだった。
中村を最後の枠にしておいてよかった……大西は一瞬、机の下にしまった左腕の時計を見た。

数十年後について全く心配がないといえば嘘になる。老老介護については考える必要がないから、両親の世話は自分がすればいいのだが、問題は両親の死後だ。自分は老いることがなくても、病気になったときに、看病をしてくれる人がいなくなる。中青の死因ナンバーワンは、病死。身体が老化しないからといって、病気にならないわけでないのだから当然だ。
しかし独り身なので、生活費は安く済んでいるほうだし養育費はいらない。その分、貯金しているので、このまま思わぬ大きな出費さえなければ、入院費や治療費もどうにかなりそうだと思っている。
……けれど、中村亜美の母親に言わせれば、『そういうことじゃなくて！』なのだろうか。
『人って絶対一人じゃ生きていけないんだから……』
俺って、一人なのか？　駅前の横断歩道、すれ違う人々は子どもを連れていたり、制服を着て友達と歩いていたり、車いすを押していたり。なかには大西と同じように、スーツを着た幼い容姿の人もいる。
大西の勤める高校には、中青の教師が他にいない。そのため、一日中高校にいると、中青が自分だけになったように錯覚するのだが、一歩外に出れば、自分と同じ人はたくさんいるのだ。
恋人をもつ中青もいるが、中青になる人というのは自分や中村のように、結婚や恋愛を人生プランに入れていない場合が多いのでやや珍しい。この前読んだネットニュースは、今年も中青が恋人を作る理由ナンバーワンは、「万が一のときに助け合うため」だったと発表していた。
うーん……合理的だけど、やっぱり、自分は恋人も必要ないと思っている。
それは、一人で生きているということなのだろうか。自分は孤独な人間なのだろうか……。
「あれぇー、先生じゃん！」
「え？」
いつもの改札を通ろうとしたとき、背中を叩かれた。振り向くと、そこには赤ちゃんを抱っこした三澤がニコニコしていた。

「ごめんね先生、今から帰りだったのに」
「いや、今日は学校出るのが遅くて、どっちみちいつもの電車には間に合わなかったよ」
同窓会以来の再会ということもあり、次の電車が来るまで大西は三澤と、駅の中にあるカフェでお茶をすることにした。
「三澤は……ってもう三澤じゃないのか？」
「あ、小林になりました！　でも、いいですよおそのままで」
三澤日向は、小林日向になっていた。
「そう？　じゃあ……三澤は、仕事の帰り？」
彼女が着ている半袖ブラウスは、なんとなくフォーマルに見えた。
「ううん、お休みです。夫も出張だしと思って、デパートでこの子の服買ってたら、もうすっかり遅くなっちゃって」
三澤の息子は、タイガ君、というらしい。まだ一歳の誕生日を迎えたばかりなのに、「先生、タイガが先生の高校入ったらよろしくお願いします」なんて笑うあたり、相変わらず気が早い。十年前、彼女が二年生になったばかりの春だったか……何を思ったか突然「うち修学旅行はあのバッグで行こ。先生、ショルダーバッグってアリ？」と質問してきたことを思い出した。
「先生、最近の学校はどんな感じですか？」
ふにふに言いだしたタイガ君をあやしながら、片手で飲み物の容器にストローを刺し、彼女は言った。
「最近は三者面談だな。今日が最終日だった」
「えー大変。そっか、だから今日遅くなった感じ？」
「そうだな。やっぱりいつの時代も、受験と中青制度で悩むのは変わらないよ」
大西は、夕飯はこれでいいやと注文したサンドイッチのラベルを剥く。
「ああ、懐かしいなぁ。……アタシ、先生にめっちゃ迷惑かけましたよね。ごめんなさい、あれだけ騒いで結局、中青にも女優にもならなくて」
可笑しな謝罪だ。しかし本人は大真面目な顔で、大西は齧ったサンドイッチを吹き出しそうになった。
「なんだその謝罪！　はは、いいんだよ、そんなこと気にしなくて。三澤が、今の生活を楽しめてるならそれでさ」
三澤はきょとんとした後、女優顔負けの眩しい笑顔を見せた。
「めっちゃ楽しいです！　女優になれなかったのは、今でもちょっと惜しかったなーって思いますけど、おかげで夫とも出会えたし、タイガにも出会えたし！　今はアパレル系の仕事してて、まあまあしんどいときもあるんですけど、アタシ女優よりこっちのほうが向いてたかも」
「そうかあ、良かった」
うんうん、と三澤は自身たっぷりに頷く。いつか中村も、こういうふうに頷ける日が来るといいな、と大西は思った。
「あ、でも。この子見てると、なんていうか……や、変なことなんですけどね？　今からでも中青になれれば、この子をず

ーっと見てられるのになー……なんて思うこと、けっこうあります。この子がおじいちゃんになる姿、アタシと夫はたぶん見れないから」
気が早い。けれど、親ならば一度は考えることなのかもしれない。大西は笑わなかった。
「あと、実家の親のことも考えると、ほら、介護とかあるじゃないですか。夫に任せるの申し訳ないし、タイガに負担かけるのも嫌だし」
「ああ、そうだな……。先生は中青だから、大人の気持ちなんて分かってないかもしれないけど、ときどき考えるよ。人は大人にならないと子どもをもてないけど、老いへの不安とか、見届けたい存在ができて、中青になりたいと思うのって、たいてい大人になった後なんじゃないかって」
三澤はストローから口を離して叫ぶ。
「そう！　ほんとそうなの！」
ふええ……とタイガ君が少し泣いた。
「あっ、ごめんごめん……。ほんとそうなんです先生。あれですね、ないものねだりってやつですね」
ないものねだり。確かにそうだ。人生における選択には常に、タラレバの後悔がついて回る。
「多かれ少なかれ、生活してると、ないものねだりするもんだよなぁ」
「二兎を追う者は一兎をも得ず。……ああ！　二兎得るじゃん」
真面目な顔をしていた三澤は、大西の顔を見てまた笑顔になる。表情がころころ変わるところも、相変わらずだ。
「先生はタイガがおじいちゃんになっても、いるじゃん、この世に！」
「ええ？　えー、それはどうだろう……理論上、ありえないことじゃないけど……あと何十年後の話だよ？」
三澤はタイガ君の頬をつつき、「よかったねー、先生いるから一人じゃないって」と優しく語りかけている。
「ね、頼みましたよ先生！」
「……分かったよ。でも今は、今の生徒達の進路指導で精一杯だから……タイガ君が、先生の生徒になったらだね」
あまりに屈託なく笑う彼女につられて、大西も笑ってしまった。